《一七》自負頑迷にして、富より起る高慢・放逸に沈み、虚榮の爲に、儀軌を無視して、名のみの犧牲を供す。

《一八》我執、勢力、不遜、愛欲、忿怒に住し惡意を抱きて、彼れら自身、及、他人の身に住せる我れを嫉視す。

《一九》斯る嫉視者は、殘酷、不善にして、輪廻界に於ける最賤人たれば、我れは斷えず彼れらを鬼性の胎に投入す。

《二〇》クンティー夫人の子よ、彼れら鬼胎に陷りて、幾多の生を經て迷亂し、我れに達する能はずして遂に最下趣に陷る。

《二一》地獄の門は三重なり、愛欲と、忿怒と、貪慾となり、是れ自我の破滅なり、故にこの三者を捨つべし。

《二二》クンティー夫人の子よ、この黑闇の三重門を脫したる人、自我に對する最善を行ひ、而して後最上趣に至る。

《二三》聖典の命令を捨て、愛欲の衝動に依て行動するものは成滿を得ず、安樂を得ず、最上趣に至らず。

《二四》故に、應作不應作の決擇に於ては、聖典のみ汝の標準たり、汝は、宜しく聖典の命令の示す所を知りて、而して後行作すべし。』

第十七章　三信分別品

《一》アルジュナ王子言く。

『聖典の命令を捨て、信念を持して犧牲を奉ぐるものあり、彼れの狀態は如何なるものぞ、クリシュナ天よ、善性か、動性か、將、闇性か。』

《二》聖婆伽梵言く。

『人間の自性より生ぜる信は三重なり、善性的、動性的、闇性的なり、今その說を聞け。

《三》バラタ族の王子よ、各人の信は本性に依て形成せらる、その人は信念所成なり、何ものを信ずとも、その人はその信の人たるべし。

《四》善性の人は天神を拜す、動性の人は夜叉・羅刹鬼を拜す、他の闇

性の人は人鬼地鬼の類を拜す。

《五》彼の聖典に命ぜられたる猛烈の苦行を爲す人は、僞善と我慢とに隨應し、愛欲、愛染の力に逐はれて、

《六》思慮もなく、身體に存する五大の群を惱まし、且、身內に住せる我れをも苦しめつゝあるものは、鬼性的決擇を有するものと知るべし。

《七》各人に愛せらるゝ食物もまた三重なり、犧牲も苦行も布施も亦同じ、今その別を聞け。

《八》善性の人に愛せらるゝ食物は、生命、存在、勢力、健全、幸福、悅樂を增上し、滋味、軟和にして、實質ありて意に適せるものなり。

《九》動性の人の好める食物は、澁味、酸味、鹽味、熱性、辛味、乾燥性、燃燒性のものにして、憂苦、疼痛を生ずべきものなり。

《一〇》闇性の人の好める食物は、時の過ぎたるもの、味の去りたるもの、腐爛せるもの、朽敗せるもの、殘食、不淨食是なり。

《一一》犧牲の結果を望まず、義務として奉げざるべからず」と思惟して、儀軌に示されたる犧牲を奉ぐるば、是れ善性的のものなり。

《一二》バラタ族の最勝者よ、犧牲の結果を期し、若しくは虛榮の爲に奉げたる犧牲は動性的のものと知るべし。

《一三》儀軌の命ずる所に隨はず、祭膳の分配なく、神咒《眞言》を伴はず、嗔施なく、信念なき犧牲を闇性的のものと名く。

《一四》天神に對し、再生族に對し、師に對し、賢に對して爲せる供養、清淨、正直、梵行、不殺生は、身的苦行と名けらる。

《一五》他の苦痛を生ぜざる言語、他の利樂となるべき言語、讀誦の常修は、口的苦行と名けらる。

《一六》心の平和、優麗、寂默、自我の制御、本性清淨、これを意的苦行と名く。

《一七》彼の三重の苦行が、若し心統一せる人に依て、結果を望まず、最高の信念を以て行はれたれば、善性的と稱せらる。

《一八》崇敬、名譽、供養を得ん爲に、若しくは虛榮心を以て行はれたる苦行は現に動搖不定にして動性的と稱せらる。

《一九》迷へる見解より、自己を慘害することに依て行はれ、若しくは他人を破滅する目的を以て行はれたる苦行は、闇性的と稱せらる。

《二〇》適當の時處に於て、適當の受者に對し、與ふるの義務ありと信じて、報恩の望みなきに與へられたる布施は、善性的なりと傳へらる。施者空受者空施物空(三輪空施)

《二一》されど、報恩を豫期し、若しくは他の結果を望み、若しくは不本意を以て與へられたる布施は、動性的なりと傳へらる。

《二二》不適當の時處に於て、不適當の受者に敬意なく、侮蔑を以て與へられたる布施は闇性的と稱せらる。

《二三》オーム《唵》、タト《彼》、サト《有》は、梵の三名として傳へらる、これに依て梵書《神學書》、吠陀、犧牲は規定せられたり。

《二四》梵を主とせるものは、恒にオーム(唵)と唱ハて後、儀軌の命ぜる犧牲、布施、苦行の式を始む。

《二五》解脱を望むものは、先づタト《彼》と唱へ、結果を豫期せすして、種々の犧牲、苦行の式及布施の式を行ふ。

《二六》プリター夫人の子よ、サト《有》は、實有の意義と至善の意義とに用ゐらる、また譽れある行作に於て、サト《義》の語は用ゐらる。

《二七》犧牲、苦行、布施に於ける固持をもサト《實》と名く、且、タト《彼、即、梵》の爲の行作をも亦サト《正》と名く。

《二八》プリター夫人の子よ、信念を伴はざる供養、施與、苦行、その他の所行は、アサト《非有》と名けらる、そは現世に於ても無、死後に於ても亦無なればなり。』

第十八章　離欲品

《一》アルジュナ王子言く。

『大臂者よ、我れは離欲と離果との眞義を各別に知了せんと欲す、逆髮の主よ、被髮鬼の殺戮者よ。』

《二》聖婆伽梵言く。

『聖者は愛欲の行作を棄つるを離欲《サンヌヤーサ》として知れり、智者は一切行作の結果を捨つるを離果《トヤーガ》と名く。

《三》或る思慮ある人は、行作は邪惡として捨つべきものと言へり、また他の人は、犧牲、布施、苦行の行作は捨つべからざるものなりと言へり。

《四》バラタ族の最上士よ、この捨離に於ける我が決論を聞け、人中の虎王よ、捨離は實に三重なりと示さる。

《五》犧牲、布施、苦行の行作は捨つべきものに非らず、そは實に行はざるべからざるものなり、犧牲、布施、及苦行は、思慮あるものゝ潔淨法なり。

《六》されど、これらの行作も、亦執着を捨て結果を望まずして、行はざるべからず、プリター夫人の子よ、是れ我が至上決擇の所見なり。

《七》また、定まりたる行作の遠離は不可なり、迷妄に依てそを捨離するは闇性的と名けらる。

《八》如何なる行作をも、單に苦なりとして、身體の苦勞を恐れてこ

れを捨つるものは動性的捨離を爲せるものにして、決して捨離の功果を得ざるべし。

《九》アルジュナよ、若し定まれる行作が單に義務として執着を捨て、結果を望まずして行はれたれば、そは善性的捨離と信ぜらる。

《一〇》捨離者、若し善性に滿ち、賢明にして、その疑念斷除せられたれば、不善の行作を憎まず、善の行爲に執着せず。

《一一》住身者《人》は、實に全く行作を捨つる能はず、されど行作の結果を捨つるものは、これを捨離者と名く。

《一二》願はしきものと、願はしからざるものと、兩者の雜糅せるものと、非捨離者の死後に於ける行作の結果はこの三重なり、されど

厭離者に取りては結果皆無なり。

《一三》大臂者よ、一切の行作の成滿の爲に、數論の教義に於て教へられたる左の五因を我れに學べ。

《一四》所依《身》、能作、各異の作具、種々各異の活動、第五に主神、是れなり。

《一五》人、その身語意に依て如何なる行作を爲すとも、その正理たると反對たるとに論なく、その動機は以上の五なり。

《一六》事實斯くの如くなるを以て、理性不了の故に、獨存の自我を能作者と見る倒想の人は實に見ざるなり。

《一七》その本性我執なく、その理性染汚せずば、假令、他の世人を殺

すとも、そは殺せるに非らず、その繫縛なし。

《一八》知識と、所知と、能知とは、行作に於ける三重の衝動なり、《動機的原素》、作具《官能》と、所作と、能作とは、行作に於ける三重の集成なり、《結果的原素》

《一九》知識と、所作と、能作とは、特性《德》の區分に於ける三種として、特性の細目に說ける所なり、是れ亦如實に聞く所あれ。

《二〇》萬有に於て、唯一不壞の本有《存在》を見、差別に於て無差別を見る、その智は是れ善性的なりと知れ。

《二一》また、萬有に於ける種々各異の存在を、別體のまゝにて知る、この智は是れ動性的なりと知れ。

《二二》また、一事を同體として執着し、原因を知らず、實義を辨へず、狹小なるもの、その智を說いて、闇性的となす。

《二三》命ぜられたる行作が、執着を離れ、愛憎を捨て、功果を豫期することなくして、行はれたれば、これを名けて善性的と爲す。

《二四》また、欲望に依り、我執に基づき、幾多の努力を以て成れる行作は、これを說いて動性的と爲す。

《二五》行作が、若し自の能力、結果《隨縛》を考へず、他の損失、傷害を慮らずして、唯迷妄に依て行はれたれば、そは闇性的と名けらる。

《二六》執着を離れ、我意を捨て、堅固と努力とに伴はれ、成功不成功に依て變ずることなければ、その能作者は善性的なりと稱せらる。

《二七》愛染あり、行果を望み、貪欲にして害心を有し、不淨にして喜憂に惱まさるれば、その能作者は動性的と稱せらる。

《二八》統一なく、野生的にして、頑冥、詐僞、邪惡、怠惰、悲觀、緩漫なる能作者は闇性的と稱せらる。

《二九》理解及、堅固の特性に關する區分も亦三重なり、富の征服者よ、各別に殘りなくこれを示すべし、請ふこれを聞け。

《三〇》プリター夫人の子よ、活動と靜止と、應作と不應作と、怖畏と無畏と、繫縛と解脫とを知る、その理性は善性的なり。

《三一》プリター夫人の子よ、法と非法と、應作と不應作とを、不如實に了解する所の理性は動性的なり。

《三二》プリター夫人の子よ、黒闇に掩はれて、非法を法と信じ、一切の事物を顚倒視するの理性は闇性的なり。

《三三》プリター夫人の子よ、不亂の堅固を以て、瑜伽に依て不動に至れる意識、氣息、五感の活動を保持する堅固は善性的なり。

《三四》されど、アルジュナよ、執着を以て結果を期待しつゝ、正義と愛欲と財富とを保持する堅固は、プリター夫人の子よ、是れ動性的なり。

《三五》プリター夫人の子よ、若し不靈にして、睡眠、恐怖、憂苦、悲觀、荒醉を脱せざる如き堅固は闇性的なり。

《三六》バラタ族の牛王よ、今我れに就て三種の安樂を聞け、常修せ

ばこれに慰み而して苦の終に到達すべし。

《三七》その初は毒藥の如く、その終は甘露に均し、この安樂は自覺の惠みに依りて生じたるものにして、善性の樂なり。

《三八》その初は甘露に均しく、その終は毒藥たり、是れ境と根との結合に依るの樂にして、これを動性の樂と爲す。

《三九》初後俱に睡眠、遊惰、不注意より生じ、自我を迷妄に導く、これを闇性の樂と名く。

《四〇》地上に於ても、また天上の神の中にも、この自性より生ぜし三特性《德》を脱せるもの一もあることなし。

《四一》敵を惱ます勇士よ、梵族《波羅門》、王族《刹帝利》、農商族《毗舍》、奴隷

族《首陀羅》の行作は自性より生ぜる三特性《德》に依て配分せらる。

《四二》靜寂、制御、苦行、清淨、寛容、正直、智識、有神思想は、自性より生ぜる梵族の行作なり。

《四三》勇壯、威光、堅固、技倆、戰鬪に於ける不退陣、布施、主宰權は、自性より生ぜる王族の行作なり。

《四四》農耕、牧牛、商估は、自性より生ぜる農商族の行作なり。奉仕の質あるものは、自性より生ぜる奴隷族の行作なり。

《四五》人は、自己の本務に心を委ねて成滿に達すべし、今如何にして自己の本務に心を委ね、成滿に進み得るかを聞け。

《四六》萬有これより展開し、一切はこれに依て遍通せらる、この自

在主に奉ずるに、自己の本務を以てせば、人は皆成滿に達し得べし。

《四七》特性《德》缺けたるも、自己の本務《義務的行爲》は、他人の本務《義務的行爲》の麗はしく行はれたるものよりも勝れたり、自性に依て定められたる行作を爲しつゝある人は罪汚に染まず。

《四八》クンティー夫人の子よ、生得の行作は、假令過失を伴へるも捨つべきに非らず、一切の經營は實に過失に掩る、恰も火の煙に依て包まるゝ如くに。

《四九》その理性は一切の方面に染着なく、その自我は征服せられ、その愛欲は排除せらる、かゝる人は離欲に由て離作より來れる至上の成滿に到達すべし。

《五〇》クンティー夫人の子よ、如何にして成滿を得て梵に達するか、何ものか知識の最高基礎たるを略して我に聞け。

《五一》純淨なる理性に依て統一し而して堅忍に依て自我を制し、聲その他の對象《境》を斥け、愛憎を捨て、《修智慧》

《五二》獨住を樂しみ、《樂寂靜》少食にして、《知足》身語意を制し、《少欲》禪定《修禪定》と瑜伽《勤精進》とを最上趣とし、恒に離欲に依止して、《不忘念》

《五三》我執、暴力、傲慢、愛欲、忿怒、貪欲を脱し、《不戯論》我所なく、平和なるものは、梵と成るに適す。 遺教經八大人覺參照

《五四》梵と成りて、自我を平和にしたるものは憂へず、望まず、一切

有類に平等にして、我れに於ける最高の信念を得。

《五五》信念に依て彼れは我れを知れり、我れは如何なるか、また誰れなるかを如實に知れり、而して如實に我れを知りて、直に彼れ《梵》に入るべし。

《五六》假令、恒に一切の行作を爲しつゝあるも、我れに歸依すれば、我が惠みに依り、永久不滅の地に到達すべし。

《五七》心より一切の行作を我れに奉げ、我れを最上の歸趣として、理性の瑜伽に依止し、恒に思念を我れに安くべし。

《五八》思念を我れに安けば、我が惠みに依り、一切の障礙を超越すべし、されど、汝若し我執よりして我れに聞くことなくんば汝は滅

亡すべし。

《五九》汝、我執に依止して「我れは戰はざるべし」と考ふるとも、その汝の決定は無益なるべし、自性は汝を限定《命令》すべし。

《六〇》クンティー夫人の子よ、自性より生ぜる自己の行作に縛せられて、汝が作すことを欲せざる所のものをも、汝は迷妄より餘儀なくこれを作すべし。

《六一》アルジュナよ、自在主は一切生類の心地に住す、その幻力に依て、恰も輪轉機に乘りしが如くに一切生類を轉動せしむ。

《六二》バラタ族の王子よ、一切の存在を以て彼れに歸依すべし、彼れの惠みに依り、汝は最高の平和に達すべし、是れ即、永遠の住處な

り。

《六三》斯く、秘密中の秘密なる知識を、我れは汝に示したり、殘りなくこれを熟思して後、汝の欲するまゝに行ふべし。

《六四》尙、一切の最極秘密なる我が至上の教語を聞け、汝は我が極めて愛する所のものなり、故に我れ汝の利益の爲に語らん。

《六五》心を我れに安けよ、我れを信ぜよ、我れに奉げよ、我れに歸命せよ、さらば汝は我れに來るべし、我れ眞實に汝に約す、汝は我が極めて愛する所のものなり。

《六六》一切の法を捨てゝ、獨一に我れに歸依すべし、我れ汝を一切の罪惡より解脫せしむべし、汝憂ふる勿れ。

《六七》汝、決してこれを他の苦行なきものに語るべからず、信念なきものに語るべからず、聞信の心なきものに語るべからず、我れを批難するものに語るべからず。

《六八》若し我れを信ずるものゝ間に、この最極秘密を傳ふるものあらば、我れに對し最高の信念を表するものたれば、この人は疑ひなく我れに來るべし。

《六九》人間に於て、斯る人よりも勝れて我が愛する行作をなせるものなく、また地上に於て、將來他に斯る人よりも勝れて我れに愛せらるゝものなるべし。

《七〇》而して若し我々兩者の間に行はれたるこの神聖なる對話

を攷究するものあらば、その人こそ、我れに知識の犧牲を奉げたるものなれと、是れ我が決論なり。

《七一》信仰ありて、不平なく、單に聞信する人あらば、その人も亦得脱して功德行者の行くべき清淨世界に到るべし。

《七二》プリター夫人の子よ、汝は果して心一境相を以てこれを聞きしや、富の征服者よ、果して汝の知識の迷妄を滅盡せしや。』

《七三》アルジュナ王子言く。

『我が迷妄は消滅せり、不死の主よ、卿の惠みに依りて、我が憶念は獲得せられたり、我れは安住せり、疑惑は已に去れり、我れは卿の教語を履行せん。』

《七四》サンジャヤ言く。

我れは、如上の希有にして身毛を竪立せしむべき對話を、婆藪天王の後身《クリシュナ天》と大我を有せるプリター夫人の子《アルジュナ王子》の間に聞けり。

《七五》廣博仙人《ヴィヤーサ、即、大史詩の編者》の恵みに依り、この最高秘密の瑜伽を聞けり、瑜伽の主たるクリシュナ天自身、我が面前に於てこれを語れるを聞けり。

《七六》王よ、この稠髪主《クリシュナ天》とアルジュナ王子との間に行はれたる、希有にして神聖なる對話を憶念し且憶念すれば、その度毎に彌增し歡喜す。

《七七》王よ、また彼の希有なるハリ神《クリシュナ天》の形相を憶念し且憶念すれば、その度毎に彌增し歡喜し、我が驚きも大いなり。

《七八》瑜伽の主たるクリシュナ天の在る處、弓箭の士たるプリター夫人の王子の在る處は、到處に吉祥あり、勝利あり、威神力あり、堅固なる方略《道義》あり、是れ我が所信なり。

聖婆伽梵歌・奥義書・梵明・瑜伽教典・聖クリシュナ・アルジュナ對話篇 終

大正七年一月五日譯了
二月廿日芳賀矢一君閲了
四月十七日於東寺寶菩提院校了

大正七年五月十三日印刷
大正七年　月　六日發行

（和譯聖樊伽梵歌）
定價金壹圓

譯者　高楠順次郎

發行者　高島大圓
東京小石川區原町六番地

印刷者　佐久間衡治
東京京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京京橋區西紺屋町二十七番地

不許複製

發行所　東京小石川區原町六番地
電話小石川一二八
振替東京一五六八六
丙午出版社

二1184

梵文聖婆伽梵歌

三六判美裝　定價六十錢　送料六錢

本書は高楠博士が和譯せられたる『聖婆伽梵歌』の原書にして帝國大學梵語科の教科書たり惟ふに聖婆伽梵歌は印度哲學史上重要の寶典たるのみならず現に印度の實際信仰上に於ける尊貴の聖書たること恰も夫の基督教徒の四福音書に於けるが如きものありこれを以て英獨伊露の印度學者は夙にこれをその國語に飜譯せり苟も梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく原書によりて直に印度の思想を味はむと欲するものは必ず一本を備へざるべからず。

發行所　東京小石川區原町六八　東京一六五六　東京市外大森六八一　電話小石川八二一　丙午出版社

終